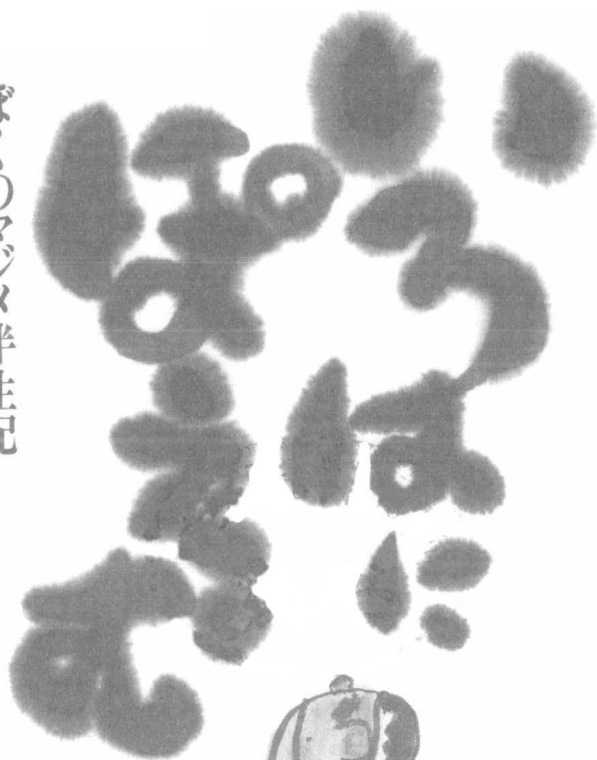


ぼくのマジメ半生記
田中小実昌

ぼくは
死



ぼくのマジメ半生記
田中小実昌



SHINJIN

田中小実昌（たなか・こみまさ）

1925年、東京生まれ。東京大学哲学科中退。ストリップ劇場の裏方、バーテン、香具師などを転々とした後、海外ミステリーの翻訳を手がける。チェイス、チャンドラー、ブラウンなどの翻訳は俗語を駆使した名訳として定評がある。『浪曲師朝日丸の話』『ミミのこと』で第81回直木賞、『ボロボロ』で第15回谷崎潤一郎賞を受賞。主な著書に『自動巻時計の一日』『オホツクの妻』など。

いろはにぼえむ

——ぼくのマジメ半生記

1985年2月5日 初版発行

著 者——田中小実昌

発行者——吉田 稔

発行所——株式会社ティビーエス・ブリタニカ

〒102 東京都千代田区三番町28番地1 秀和三番町ビル

販 売 (03) 238-5721

電話 顧客サービス (03) 238-5711

振替 東京 1-131334

印 刷——信毎書籍印刷

製 本——堅省堂

© Komimasa Tanaka, 1985

ISBN4-484-85203-9

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

いろはにほえむ——目次

勤勞奉仕から動員へ

饅頭マントウとストーブ

乳にゅうパンとり

東京フオリーズ

バスボーイ

エントツ掃除

張おやじつちやいけない親父の頭

イージイ・ヤクザ

三百六十五夜東京編

7

18

30

41

52

63

74

86

95

乞食からもらったオニギリ

ライオンの代役

高市^{たかまち}まわり

牛ドロボーになったり、麻薬窃盗犯になったり

港さがし

ヒツジのバサ打

横田基地のバンブダンプ

失業保険大好き

不動産屋、そして医学研究所

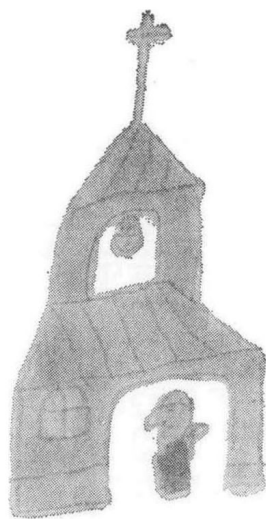
あとがき

装幀・挿絵 村上 豊
編集協力 株式会社青泉社

いろはにほえむ

——ぼくのマジメ半生記

勤労奉仕から動員へ



ぼくは東京の渋谷区の日赤産院で生れた。大正十四年（一九二五年）四月二十九日の天長節（天皇誕生日）だ。ぼくの父は東京市民教会の牧師をしていた。この教会はおなじ渋谷区の千駄ヶ谷にあったが、そのころの地名は、東京府豊多摩郡千駄ヶ谷町大字千駄ヶ谷四九一番地で、千駄ヶ谷小学校の前、明治通りのななめむこう側、いまは第八宮庭というマンションがあるあたりらしい。

ここに、東京市民教会とその附属幼稚園があった、とぼくをつれて行って、おしえてくれたのは、マンガ家の岡部冬彦さんだ。ぼくの父が園長だったこの幼稚園を岡部冬彦さんは卒業している。また、三木鮎郎さんもこの幼稚園にいったそうだ。東京市民教会と幼稚園の土地は、徳川本家から借りたもので、おもしろい。

東京市民教会は、アメリカ西海岸のシアトルの日本人教会の牧師だった久布白直勝先生が奥さ

んの廃娼運動で有名な久布白落実先生といっしょに、苦勞してつくった。アメリカなどのミッシェンからの援助なしに、独立した自由な教会をもちたいとおもったのだらう。

内村鑑三も、さいしょに札幌で集会所をつくるとき、ミッシェンの金は借りたくないし、と苦勞したことが、内村鑑三著のもとには英文の『余は如何にして基督信徒となりし乎』に書いてある。内村鑑三はアメリカのマサチューセッツ州のアマースト大学神学部を卒業している。ぼくは、ひと夏、アマースト大学の寮にいたことがあるが、同志社大学を創立した新島襄もこの卒業生で、新島襄のことは、しょっちゅう話にでてきたけど、内村鑑三がここの卒業生だったことは、ニホンにかえってから知った。内村鑑三がミッシェンの援助をうけず、独立した集会所をもったからだろう。内村鑑三が札幌農学校でおそわった、れいのクラーク博士は、アマーストの町にあるマサチューセッツ州立大学の前身の農科大学の教授や学長もしたようで、内村鑑三はアマーストには縁があつたのだ。よけいなことだが、州立大学のキャンパスに、ニホンからおくられた銀杏の木があつて、ニホンの臭い木、とこの木を知ってる者は、わらいながら鼻をしかめる。銀杏はアメリカではめずらしい。そして、銀杏の実がおちるときの、あの臭さも異様に感ずるらしい。

東京市民教会だが、大正九年（一九二〇年）六月八日に、落成した新会堂でさいしょの礼拝がおこなわれたが、これが久布白直勝牧師の告別式だった。久布白直勝先生は結核で六月三日になくなつたのだ。

そして、翌大正十年（一九二一年）九月にぼくの父が東京市民教会の牧師になり、大正十四年

四月にぼくが生れ、そのころから、父ははげしくなやみだしたらしい。信仰がわからなくなったということだが、教会の牧師が信仰がわからなくなり、なやんだりしてはこまる。また、同時に父は足もとからぼこんぼこんときあげられてたのではないか。ふつうは、聖霊を感じるなどと言うが、聖霊は感じるものかどうか。

父は東京市民教会をやめて、九州の小倉の西南女学院附きの牧師になったが、ここをやめて、八幡製鉄の持ち山の山番をしていたときいた。八幡製鉄のえらい人のなかに父の信者がいたのだろう。しかし、山番というのは、どんなことをしたのか。ぼくはちゃらんぼらんだが、父はマジメな男だから、山番の仕事もちゃんとしたとおもうけど、となりあわせの家二軒のあいだをぶち抜いて住んでたというから、ここでも集会をやっていたのではないか。

その後、父は若松にうつったように、昭和四年（一九二九年）広島県の軍港町呉のバプテスト教会の牧師になり、幼稚園長もやった。

いまは丁目がかわったが、この教会は呉市本通九丁目から中通にぬけるせまい道に門があった。このせまい道を、毎日、たくさんの人がとおった。教会の門のななめ前は市場の入口で、この市場は、アーケードのように白い布が通路の上にわたっており、布はうすよごれてねずみ色で、風が吹けば、風をはらんでふくらむ。市場は混雑し、長い市場で、どこまでもどこまでもつづく。うちの幼稚園にいったぼくは、この市場のはては知らなかった。市場のおわりまでいったことはなかったのだ。市場の名前はトウセンバといったが、どんな漢字をあてるのか、いまだに、ぼ

くは知らない。この市場とほぼ並行して、本通九丁目からチンチン電車が遊廊のある朝日町に
ついていた。

そのころの呉の町はニホンでもいちばん人口が稠密なところだったそうで、広島からきた人も、
呉は、ほんまに、ようけ人がおるのう、とびっくりしていた。

その呉の町のなかでも、バプテスト教会の前の道は、せまいせいもあるが、そろそろ人がある
いていた。教会の門の外側には、たいてい一組ずつの乞食がいて、大きな、りっぱな犬をつれて
る乞食もいた。ぼくが転校した小学校で、教会の門のよこで乞食をしていた男の子とあい、なか
よくなったこともある。

教会のなかに、酔っぱらいのトーフ屋が寝泊りしていたのをおぼえている。この酔っぱらいが
寝てる部屋は酒くさく、垢くさく、ひどいにおいがした。酔っぱらって、商売用のトーフがこま
かくつぶれてぶちまかれ、あおむけに道にひっくりかえり、「さあ、殺せ」なんてわめいている、
映画のシーンみたいなのも、なんども見た。しかし、なんで、父はあんな酔っぱらいを、教会の
なかに寝泊りさせていたのだろう。

うちの教会の前のうちはテント屋で、ずいぶん繁盛したのか、店はどんどん大きくなった。急
に需要がふえた商売だったのだろう。

昭和七年（一九三二年）ぼくが小学校一年生のとき、おなじ呉市のなかの東三津田に引越した。
山の中腹に、ぼつんとはなれてぼくの家があり、あとで、教会も雑木のあいだにできた。教会と

いっても、日本家屋で、十字架もない。十字架のない教会など、ぼくのうちぐらいではないか。この教会は、ミッションとも、ほかのプロテスタントの教派ともぜんぜん関係のない独立教会だ。東三津田の山の南の斜面が、いちばん上の稜線まで、ぼっかり教会の土地で、その面積がどれくらいあるのかは、ぼくは知らない。呉駅で列車をおりると、ぼくの家と教会のあるところは、すぐわかった。瀬戸内海には段々畑がおおく、段々畑が山頂にまでたっしていたりする。また、段々畑がなくても、このあたりは禿山にちかい山だった。そんなあいだに、ぼくのところは、遠くからでも木々のみどりが見えた。

ぼくの家よりすこし下のおとなりには、山（とよんでいた）の世話をする人の家族の家があり、この人は農業学校をでた人だったが、花をつくるのが好きで、いろんな花がいっぱいあった。そのほか、イチゴ畑、ミカン畑、西洋ビワの木、イチジクの木、ザクロの木などもあった。西瓜もなんどかつくったが、ちいさいのしかできなかった。

ところが、三年前の夏、はじめて、大きな西瓜が二つできた、とぼくの妹が東京のぼくのうちにきて、言った。妹はもう孫もいるが、妹の主人が、ぼくの父の死後、ここの牧師をやっている。しかし、できた西瓜も、ある朝起きてみたら、カラスがなかの実だけを、そっくりきれいにたべてたそうだ。そのカラスのたべかたのきれいに、妹は感心していた。

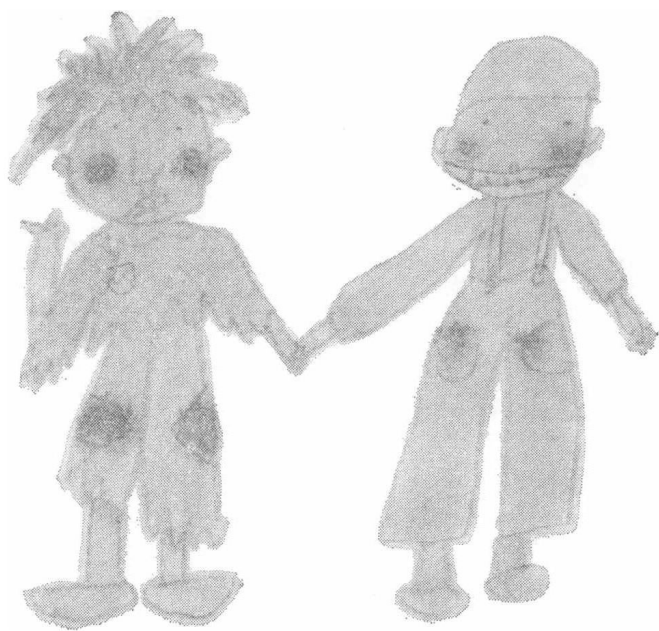
はなしがそれだが、山の世話をする人がいなくなった。中国で戦争がはじまり、世の中はめまぐるしく変っていたのだらう。戦争をすると、いろんなことが、びっくりするほど変わる。教会も

貧乏になったのかもしれない。

畑のある家は、家の者はみんな畑仕事を手伝う。うちの父も、足がわるい母も畑仕事をした。しかし、ぼくは、まるっきり畑仕事は手伝わなかった。あるとき、切りたおして、うちの裏の空地へおろしてきたミカンの木を、父が、薪たきぎにするために枝や幹を適当な長さに切るように言った。これは、たいへんめずらしいことだった。ところが、ぼくはノコギリで、右手の甲にケガをした。ぼくは右ききなのに、右手がつかれたのか、左手でノコギリをもつてたらしい。医者にいき、なん針か縫い、ミカンの木の薪づくりは、それっきりになった。

ぼくは、たいへんに不器用で、手もからだもうごかない。だから、手をうごかすことはきらいだ。つまり、はつきりナマケ者だけど、ニンゲンがかかるいので、買物をたのまれたりするのには、ちっともかまわない。しかし、買物が好きなわけではない。だから、これとこれを買ってきてとリストをわたされると、はいはい出かけていく。これも弁解だろうが、そんなところもあるのだ。呉は海軍サンの町で、海軍工廠はニホンの巨大な工場だったのかもしれない。当時としては、とてつもない軍艦の戦艦大和も呉海軍工廠でつくった。バプテスト教会の前のテント屋の社長も海軍をやめた人で、そんな人が呉の町にはたくさんいた。

アルバイトというコトバも、あれこれ意味が変った。さいしょ、ぼくが耳にしたころは、ティール・アルバイトと言って、博士の学位ダイトルをとるための研究や勉強の意味につかっていた。それ



が、ナチス・ドイツのアルバイト・ディーンストを真似て、勤労奉仕のことになった。そして、戦後、いまみたいな意味でつかわれたした。

おかしなはなしだが、ぼくは、どんなアルバイトもした気はない。戦争中、呉一中（現三津田高校）のときにいったのは勤労奉仕で、まだ、アルバイトという言葉はつかわれていなかった。また、勤労奉仕もせいぜい二度ぐらいだろう。

呉の町の北にそびえている灰ヶ峰のむこうに勤労奉仕にいったのをおぼえている。じつは、この勤労奉仕しか記憶にない。灰ヶ峰の裏側のほうを見るのは、ぼくははじめてで、こんなところに、広々とした高原があるのにおどろいた。人でごったがえしている呉の軍港から、たった山ひとつへだたったむこうに、とびつくりしたのだ。

ここでの勤労奉仕はジャガイモ掘りだった。大きなジャガイモで、うちの畑のジャガイモの倍はあった。それを、オヤツにはまるごと茹でてくれ、塩をつけてたべた。そのころは、サツマイモも農林一号とかいうのがでていた。大きなサツマイモだが、味はおちるとのことだった。

昭和十六年（一九四一年）十二月八日に太平洋戦争がはじまった。ぼくは中学四年生だった。太平洋戦争がはじまるまえのことを戦前と言う人があるが、あきれてしまふ。戦争はずっとまえからつづいていた。太平洋戦争がはじまったときには、ぼくたちは、もう長いあいだ腹をすかしていた。一食、たべ足りなくても腹がすくの、それが、なん日もなん年もつづくのだ。

昭和十七年（一九四二年）四月、ぼくは旧制福岡高等学校に中学四年からはいった。中学の同